

総評

日常からの国際防災連携のために

西田 昌之

チェンマイ大学 日本研究センター 講師

今年もチェンマイ大学人文学部日本研究センターより学生を受け入れて頂きましてありがとうございます。本年は日本において東日本大震災被災5年目に当たります。いまだに避難生活の中でご苦労されている人がいらっしゃる中で、様々なことが過去のこととなり始めています。しかし、その一方で震災の記憶を風化させないようにする活動が各地で行われています。このような活動の中でも、お茶の水女子大学の諸先生方、活発な学生ボランティアの皆さんのご努力によって、今年で第五回を迎えることとなった国際学生シンポジウムは震災の経験を発展的な形で継承する堅実なプログラムとなっております。日本での経験を通じて、世界中の学生の間で防災の意識を高め、相互に国際防災連携を模索してゆく試みは今後も継続される意義のある活動になっていると思います。

この度、第五回国際学生シンポジウムを拝聴いたしまして、大きく二つの視点が顕著になってきたように思われます。一つは日常に対するまなざしです。東日本大震災から5年目ということもあり、災害の経験や対応をいかにそれぞれの国の日常の中に定置し、また新たな災害の際にどのように生かしていくのかという点が多く発表されたかと思えます。皆が普通の日々の中で防災への意識を持続させ、かつ楽しく行うためにはどうすればよいのだろうかとその日常性とのつながりの中で多くの発表と提案が行われました。

もう一つは国際連携への視点です。特に様々な国々からの善意を効率的に災害支援に結び付けていくことによって、大規模で多様な様相を持つ災害に際しても柔軟な対応と復興のための国際的な連携が可能になるというものです。さらにそれぞれの国々における災害対応へのアイデアの共有化が行われました。SNS、新しいファンドレイジング、企業連携、ボランティアツアーなど先進的なテクノロジーと制度を利用した新しい災害支援が紹介されました。

カレル大学メトリチコヴファーさんからは、チェコが直面している水害を防ぐために日常の消費行動や展覧会の開催から、森林保全のためのファンドレイジングが行われていることなどが紹介されました。また、チェンマイ大学ナッタゴンさんからは、タイの三つの大災害と対応の問題点を紹介し、さらにサイクリングを通じた楽しい防災のあり方について提案しました。大連理工大学の張玲玲さん、劉曉穎さんは、大連市の防災意識の調査、防災用品の準備の面の調査から、日常的な学生による防災活動の必要性を提案してくれました。キム・ファジンさんとユン・ジソンさんは、Webを通じたフラッシュモブやタンブラー持参からの環境保全からの防災・減災を訴えました。いまだに多くの被災者を抱える日本からは、お茶の水女子大学の橋本さんより、被災児童に関する支援に関わる現状等が報告されました。高橋さんは被災者としての対人関係とイメージに対する考察を提示してく

れました。

二日目、坂口さん・勝本さんからはボランティアツアーの活用について紹介してくれました。また佐々木さんは福島南相馬「野馬追」などの祭りを通じて、地域性の称揚と地域の人々の心の復興の関連性について発表されました。また小口さんは高齢者と子どもの精神福祉の問題と、地域製品の開発を通じた学生の支援の可能性について報告してくれました。

今回のお茶の水女子大学のプログラムを通じて、日常的な災害リスクの低減、そして日常からの災害への備えに対して関心が向けられました。すでに多くの研究者が述べているように、現代社会において、災害を偶然の天災とのみ考えることはもはやできません。非常時の柔軟な対応と努力は非常に重要ですが、災害が起きていない日常から災害リスクを低減し、潤滑な復興を助ける情報を蓄積し、社会資本として災害に強い新しい社会のしくみを生み出してゆく取組みが必要とされることを改めて確認させて頂きました。

今後も地道で着実な日本発の国際教育として本シンポジウムが継続されることを願っております。

親はなくとも子は育つ

細谷 葵

お茶の水女子大学 グローバル人材育成推進センター 特任准教授

私が初めて、この国際学生フォーラムに参加する学生さん全員と顔を合わせたのは、3月13日、茨城県行きスタディツアーの朝でした。海外学生の皆さんが来日した頃からあいにくの寒の戻りでとても寒く、どんよりとした空の下、非常に言葉少なに立っている海外学生とお茶大生の皆さんを見て、ちょっと不安になりました。昨日すでに都内のスタディツアーをしているはずだけど、まだあまり仲良くなっていないのかな？ フォーラムを楽しんでいないのかな？ …。バスに乗り込み、お菓子など回してもまだ沈黙の車内（お菓子の袋はきれいに空になって返ってきましたが）に、不安は募るばかりです。

思えば当初から、心配の多いフォーラムでした。昨年度までほとんどこの企画にかかわっていなかった私がいきなり実施担当者となり、自分自身がよくわかっていないまま開催した、履修希望者説明会。昨年度のフォーラム参加者に説明会に来ていただいて（鈴木香織里さん、富岡志寿子さん、ありがとうございます！）ようやく、フォーラムでの諸活動について私も説明会参加者と一緒に学んでいる有様。こうして何とかかんとか始めた学生募集でしたが、今度は思うように学生が集まりません。海外の大学については、この機会にアメリカの女子大学との交流も広げようと意気込み、招待大学を12校に増やして募集をかけましたが、確保されていた奨学金の人数が少なかったことや、こちらの広報活動が後手後手だったこともあり、参加申し込みをしてくださったのは5校8名のみ（この5校の皆さんには、心より感謝申し上げます）。お茶大生も昨年度の半数程度しか集まらず、昨年度までどちらかを選択して担当してもらっていた、シンポジウムでの口頭発表とイベント企画などのボランティア活動ですが、今年のお茶大生参加者には一人で両方やっていたかねばならなくなりました。大きな負担だったはずで、申し訳ない気持ちで一杯です。しかし、率先して学生代表に立候補してくださった橋本里奈さんをはじめ、皆さんそれぞれの担当に尽力してくださり、教職員スタッフの皆さんの献身的な働きもあって、フォーラム開始前にはすべて準備を整えることができました。ところがそうしてほっとしたのもつかの間、お茶大生スタッフとして準備作業をがんばってくださっていたうちの一人である喜古萌さん、続いてグローバル教育センター長・戸谷陽子先生までインフルエンザに倒れ、やや寂しいフォーラムの幕開けとなってしまいました。そして迎えたフォーラム活動2日目、茨城スタディツアーの静けさに、このフォーラムは成功するのかという不安混じりの疑問が、また私の心に湧きあがってきたのでした。

東海テラパークでの原子力発電に関するレクチャーは、とてもパワフルに熱のこもった講義をしていただきましたが、専門用語が多かったけど、みんな理解できたかな…？ お

弁当は口に合ったかな…？ と、何もかもが心配です。ところが、2番目の見学先、原子力科学館あたりから、何だか空気が変わってきました。この館にあるものが世界最大だという、放射線が肉眼で見える霧箱を囲んでワイワイ盛り上がったり。原子力発電の仕組みや放射線の性質がわかるゲームを楽しんだり。自由見学では、あちこちで話の輪が咲いています。一日がかりのバスツアーの帰りというのは、たいていみんな疲れて口数が少なくなるものですが、逆に行きよりもにぎやかな車内になり、渋滞で到着が遅れても、降りた皆の目は生き生きとしていました。このフォーラム、大丈夫かも、と、胸をなでおろした瞬間でした。

(後で読んだ感想文によると、この後皆さんでお好み焼き・もんじゃ焼きに行かれたとか。疲れを知らない若いパワーに感銘を受けるとともに、やはりそういう雰囲気になられていたのだな、と嬉しくなりました)

翌日の開講式では、式が終了してから次のスタディツアーまで余剰時間が出てしまいましたが、皆さん時間をもてあます様子は微塵もなく、大テーブルに全員集まってワイワイガヤガヤ、すっかり打ち解けています。国際学生フォーラムの大目的の一つである、学生同士の国際交流の推進の方は、もう問題なさそうだなと感じました。ではもう一つの目的、「グローバルな視点からグローバルな課題解決に取り組むことができる人材の育成」はどうでしょうか。

学内活動の2日目、いよいよフォーラムのテーマに関わるシンポジウムの最初を飾る、「グローバル文化学環・陸前高田実習報告会」では、国際学生フォーラムの学生は皆さんとても大人しく、自発的な質問もほとんど出なくて、グローバル文化学環の先生方も、「言葉が難しすぎるかな？ よくわからないかな？」と内々でご心配。私もまた少々、やきもきしてきました。しかし、最後の討論時間に「一人一言」とマイクを渡されると、皆さんそれぞれの視点からのしっかりした所感を、きちんと述べるではありませんか。「特にありません」などと言う人はいません。しかも各々、実習参加学生の報告、ゲストスピーカーのご講演から新しい知識を得たり刺激されたりと、ちゃんと内容を受け止めているようです。フォーラムの一日一日は決して無駄になっていないと、大きな安堵を覚えました。

その後の2日間は、フォーラムのコアとも言える国際シンポジウムです。参加学生の皆さんが、災害に対して自分たちは何ができるのかについて、それぞれのアイデアを発表しました。学生さんですのでどうしても、夢のようなアイデアも多少は出てきましたが、一方で、実際に学生たちが行っている活動や、非常に実現性の高い活動をしっかり調査している発表もあり、その多様な内容に楽しませてもらいました。チェンマイ大学の西田昌之先生をはじめ、佐々木泰子先生、菅生早千江先生、石田安実先生、渡辺紀子先生、

原由紀恵先生らお茶の水女子大学の先生方もシンポジウムにご参加くださり、それぞれのご経験に基づく、学生たちへの示唆や問題提起をいただき、議論の内容を大変豊かにしてくださいました。初日のディスカッション・タイムでは、始めはやや沈黙が支配したものの、最後には、福島県、宮城県出身の佐々木美理さん、高橋絢美さんから率直な意見も飛び出し、そんな意見が出せるほど信頼感のあるグループになったのだと、喜ばしい気持ちでした。

そして2日目は、異なる国籍の人同士で小さなグループになってもらい、グループ・ディスカッションをしてもらいました。するとどうでしょう。教室にワンワンと声が満ち溢れるほどに議論が盛り上がり、しかもその後の議論内容の発表では、メディアの問題、あるべきボランティアの姿、そこにあって自分たちがすべきことは何か、などについて、どのグループも非常にしっかりした内容の議論をしていてくれたことがわかりました。

ここにおいて、私の中の「不安」は完全に払拭されました。私などが心配しなくとも、セッティングさえ提供してあげれば、学生の皆さんは自分たちでちゃんと国境を超えた交流をして信頼関係を築き、「グローバルな視点からグローバルな課題解決に取り組む」力を培っていったくれたのです。表面は静かであっても、参加学生の皆さんそれぞれに、何者かを吸収し、自分の中に蓄積していったくれた1週間だったのだとわかり、事前の苦勞も吹き飛ばす気持ちがしました。閉講式で皆さんが口々に言ってくださった「楽しかった」「参加して良かった」「いろいろな国の友達ができた」という言葉は、この思いを裏づけしてくれたようで、苦勞が多くても我々教員が教育プログラムを実施するのは、こういう言葉を聞きたいがためなのかもしれないとさえ思いました。

大学生の皆さんを「子」にたとえるのは失礼かもしれませんが、「親はなくとも子は育つ」という言葉が、私の脳裏に浮かんできました。この国際学生フォーラムに参加された皆さんについては、私はもう心配する必要はありません。フォーラムの経験を、ちょっと変わったバケーションとしてここだけで終わらせるような人は一人もいないはずです。ここでの経験をスタート地点として、未来へ向けて何かを成し遂げてくださる人ばかりだろうと、今は心底信じられます。どうか、東日本大震災のような大きな災害が今後起きても、現状とは異なる、苦しむ人を最小限にするような対応ができる世界を、ぜひ若い皆さんの力で作ってほしいと、願うばかりです。

最後になりましたが、フォーラムに参加してくださった皆さんはもちろんのこと、素晴らしい学生さんたちを本学にお送りくださった、カレル大学、チェンマイ大学（西田昌之先生には国際シンポジウムの講評、総評までご助力いただきました）、大連理工大学、釜山外国語大学、ヴァッサー大学の先生方、本フォーラムの教育活動にご協力くださった本学の先生方、海外学生受入れを助けてくださった学生支援機構（JASSO）、開催が近づくにつれ八面六臂の活躍をしてくださった長塚尚子さんを始め、がんばってくださった有家佐和

子さん、高柳磨美さん、相羽美代子さんら AA の皆さん、学生のボランティア活動面を疎漏なくマネジメントくださった酒井彩先生、皆様のお力がなければこのフォーラムは存在しませんでした。心よりお礼申し上げます。